

## 女歌、「恋歌」における「わくらばに」について

佐藤茂樹

「わくらばに」という詞は、『万葉集』にも三首あるが、在原行平の「わくらばにとふ人あらばすまの浦にもしほたれつつわぶとこたへよ」（『古今』雑・九六二）の歌が『新撰和歌集』『古今和歌六帖』『奥義抄』『近代秀歌』『詠歌大概』などにも採られ、有名と言える。「わくらばに」は、勅撰集において、『古今集』の行平歌以外には、『新古今集』に五首、『新勅撰集』に三首、『続千載集』に一首、『新拾遺集』に二首ある。『古今集』から『新古今集』の間は一首もない。『新古今集』時代に再発見され、流行つたと見られる。私家集においては、そうではなく、『古今』から『新古今』の間に詠まれていた。また、同意である「たまさか」は『万葉集』に五首、『古今集』にはないが、『後拾遺集』に四首、『金葉集』に二首、『詞花集』に一首、『新古今集』に一首が見られる。「たまさかに」の方が「わくらばに」より、「歌ことば」として定着していたと言える。それだけに、『万葉集』歌の次に詠出された『古今集』の行平歌は画期的であったと言える。

『古今集』においては、「雑」の歌で用いられた「わくらばに」は、その後恋歌にも用いられる。本稿では「わくらばに」について、恋歌以外と恋歌での使われ方を考察し、「わくらばに」がどのようにして恋歌の詞となったのかを考える。

### 一

「わくらばに」は、「たまに。偶然に。まれに」といった場を一首の上に明らかにする詞である。早い例である『万葉集』には次の三例がある。

- ① 「こころにはわすれぬものをたまさかに（わくらばに）みぬひさまねくつきぞへにける」  
（相聞 六五六 大伴宿祢駿河麿）
- ② 「わくらばにひととはあるをひとなみにあれもつくるを」  
（雑歌 八九六 山上憶良）
- ③ 「ひととなるるはかたきをわくらばになれるあがみはしにもいきもきみがまにまにとおもひつつ」  
（相聞 一七八九 笠朝臣金村）

②③ともに、「わくらばにひととはある」「わくらばになれるあがみ」とあり、たまたま、この世に人として生まれたということの意味している。まさに、偶然という状況を説明している。③は恋歌ではあるが、「わくらば」と恋の心とは直接関係しているのではない。①は恋の歌として、「たまさかに（わくらばに）

みぬひさまねくつきぞへにける」と、たまたま逢えない日が多くなり、多くの月日が経ったと、男の立場から、逢えないことの言い訳をしている。逢うつもりがないのではなく、たまたま逢えない日が続いたというのである。偶然逢えなかったことを力説する。この「わくらばに」は言葉通りの意味であるが、男の逢えないことの弁解の詞として有効に機能している。これら『万葉』歌においては、②③は、「人身は請がたく」といった「人間としてこの世に生を受けることは容易ではなく」ということを説く仏教思想の影響を受けた発想と言える。観念的に捉えられた詞である。①の例は、訓みの問題があり、対象から外すべき例かもしれないが、「わくらばに」は、「たまたま」といった状況を的確に説明する詞として機能している。

「たまさか」について、『万葉集』では、①歌以外に、次の二首がある。

④「ゝわたつみのかみのをとめにたまさかにいこぎむかひあひとぶらひ」

(雑・一七四四「詠水江浦嶋子一首」)

⑤「たまさかにわがみしひとをいかならむよしをもちてかまたひとめみむ」

(正述心緒・二四〇〇)

④歌は、浦嶋太郎が偶然、舟を漕いでいて「わたつみのかみのをとめ」に出会ったことを詠む。⑤歌は、偶然見た人とまた、会いたいと詠む。ともに、現実偶然出会ったのである。わずか五例ではあるが、同じ意ではあっても、「わくらばに」は、仏教思想を背景に置いた観念的に捉えられる詞であり、「たまさかに」は現実体験した偶然を表す普通の言葉であり、和歌表現であったと思われる。

そうした中、『古今集』の行平歌は、たまたま問う人がいたならばと、現実的な表現の中に、観念的な発想の「わくらばに」を用いており、画期的なことであった。

⑥「わくらばにとふ人あらばすまの浦にもしほたれつつわぶとこたへよ」

(『古今』雑・九六二)

行平歌の詞書は「田むらの御時に事にあたりてつのくにのすまといふ所にこもり侍りけるに、宮のうちに侍りける人につかはしける」とある。行平の安否を尋ねても良いはずの都人からの便りもないことに対して、行平は便りを望む気持ちから、「わくらばにとふ人あらば」と、偶然に私のことを尋ねる人があるならば、と詠じた。たまたま問う人があったというのではなく、まれにでもよいから尋ねて欲しいという切なる思いが込められている。表現態度は大様であるが、心中は切実である。万葉歌の④⑤の「たまさかに」は偶然に出会い、見たのであるが、行平歌の「わくらばに」は、偶然の出来事を詠じたのではない。たまにでもよいからといった意味を内包する歌ことばであったと思われる。

行平歌以後、新古今時代以前までの、恋歌ではない例歌を挙げる。

- ① 「わくらばにいきてもみゆる物ならばよみがへるとて猶やうとまん」  
（『元輔集』二五七）
- ② 「かたみといふあふぎの風はわくらばになつばかりこそ思ひいでられめ」  
（『嘉言集』五一）
- ③ 「わくらばにあへるおやともしらずして猶くさのほにやどりをぞする」  
（『定頼集』一七六）
- ④ 「わくらばになどは人のとはざらんおとなしがはにすむ身なりとも」  
（『行尊大僧正集』二〇〇）
- ⑤ 「わくらばにたづねんひとまたにふかきやはかすみにうづもれぬらん」  
（『教長集』春歌・三五）
- ⑥ 「しばぐるましばしとどめよわくらばに山ほととぎすなのるをりしも」  
（『親宗集』二八）

（佐藤茂樹）

①は、詞書に「式部丞かねずみ、はやくしにけりととはざりければ、国よりよみてあげける」とある。「しにけり」とある人物は、兼澄とする、藤本一恵氏、元輔とする、後藤祥子氏の二説ある。<sup>(2)</sup>ここでは、藤本一恵氏の「かねずみ」とは誰かという考証に際して「元輔の歌友の源兼澄を擬したいところだが、源兼澄は元輔の死後も活躍し」（前掲論文）とある、史実を重視し、後藤祥子氏の「式部丞兼澄が、私が肥後でもう死んでしまったと思っていつこうに何も言うてよこさなくなりましたので、国から京へ言ってやりました」（前掲論文）という解釈に従う。「いきてもみゆる」は「行きてみる」と「生きて見ゆる」の掛詞である。「わくらばに」は両方に掛かるが、意味としては偶然にである。「偶然、京に行ってみた」「偶然、生きた姿が現れた」という意味となる。一首は、偶然京に行き、偶然、亡くなった私（元輔）の、生きた姿が現れるならば、甦ったといって、やはり、私のことを兼澄は嫌うでしょうかという意味である。この例歌の「わくらばに」は、実際に「わくらばに」行ってみたわけでもなく、「わくらばに」甦ったのでもない。仮定として、発想された詞である。それだけに、行平歌に近い発想である。

②の詞書は「あなかへくだる女に、ある女の、あふぎをさまざまにして、かたみにせよとてなどいひおこせたりければ」とある。形見として贈られた扇ではあるが、常にはなく、扇を使う夏の頃だけ、偶然に思い出されるだろうと詠む。「わくらばに」思い出すというのである。

③の詞書は「みたけさうじしてつれづれにおぼされけるに、経のさるべき所所、人にもよませ我もよみ給ひけるに、しすくさうあむといふ所を」とある。経文に関わって詠まれた歌である。偶然に出会った親だとは分からずに、依然として草庵で宿りをしていると詠む。この「わくらばに」は偶然に会ったのであるが、親とは分からず、会った甲斐はなかったのである。

④の詞書は「たよりにつけて、とふ人のとはぬも侍りしかば」とある。訪うという便りを出しながら、訪れることのなかった人への歌である。おとなし川に住む、人の訪問のない私ではあるが、たまにはどうして訪れてくれないのかと詠む。恋歌ではないが、人を待ち、人恋しい思いを詠じるという点では、恋歌に通じるものがある。訪れがないので、「わくらばに」でもよいから訪ねて欲しいと詠む。作者の置かれた立場は行平と似ており、「わくらばにとふ」という発想は、行平歌が『古今和歌六帖』にも採られており、行平歌の影響を認めることが出来ると思われる。

⑤は歌集に「春霞といふをだいにてよめる」と題した、八首のうちの一首である。「春霞」という題に即して、谷深き所にある宿は、今頃、霞に埋もれているだろうと詠む。その宿を「わくらばに」訪ねるといのである。「わくらばな」訪問を思いつくのは、行平歌の「わくらばにとふ人あらば」に应えて、訪う人を発想したと思われる。行平歌の影響が考えられる。

⑥の詞書は「範玄僧都歌合に、山路郭公」とある。柴車に止まれと命じる。偶然、山時鳥が鳴いた、丁度その時だからと詠む。題詠なので、実景とは言えないが、真実らしく聞こえる。まさに、偶然山時鳥が鳴いたと理解される。

以上、用例としては多くはないが、偶然、何かをし、何かが起こったのである。その偶然は、①④のように想像上のものであれば、②③⑤⑥のように、まさに予期せぬ偶然の場合もある。前者にあつては、一首の導入となり、後者にあつては、一首の中心的抒情に関わるものである。④⑤は行平歌の影響が考えられる例である。

### 三

ここでは、行平歌以後、新古今時代以前までの恋歌を考察する。

- ①「わくらばにまれなるひとの手枕はゆめかとのみぞおほめかれける」  
（『寛平御集』二四「御かへり かねなの少将のむすめ」）
- ②「わくらばにあふかはあふかみちのくのしのぶもぢずりかぞふばかりぞ」  
（『海人手古良集』（師氏）四九「あひての恋」）
- ③「わくらばにあまのかはなみよるながらあくそらにはまかせずもがな」  
（『斎宮女御集』一二六「七月七日」）
- ④「大井河るせきのみづのわくらばにけふはたのめしくれにやはあらぬ」  
（『三元輔集』二二五、「ある人につかはし」）
- ⑤「わくらばにきたる時だにからころもあふよしもなきうらみをぞする」  
（『千穎集』七四・怨十首）
- ⑥「わくらばにとふことのはも山風の吹くおとをのみきかむと思ひし」  
（『和泉式部続集』六三四）
- ⑦「わくらばにまゐくるふしやたえなましいとあやまちのしげくみゆれば」  
（『相模集』一六九）

⑧「わくらばに錦のひもの解けぬればうらなき物はよるのさ衣」

(『堀河百首』「初遇恋」一一七〇 匡房)

⑨「わくらばに恋しき人に逢ふとみる嬉しき夢は覚めずもあらなん」

(『堀河百首』「夢」一五四〇 師頼)

⑩「いかにせんわくらばにだにとはばこそ思ふ心の程もかたらめ」

(『基俊集』一六六)

①の「わくらばにまれなる」は、同意の詞を連ねて、訪れの稀であることを強調している。「わくらばにまれなる」逢瀬であるが故に、男の手枕は夢のことかとはつきりしないように思われると詠む。逢瀬後の朝の歌である。後朝の歌であるが、別れの歎きよりも逢瀬が稀であることの歎きを言うのが主眼である。「わくらばにまれなる」の後には、「来・訪れる」などの詞が省略されている。「わくらばに」ではあるが逢瀬はあることが分かる。

②の「わくらばにあふかはあふか」は、たまに逢うのは逢うと言えるのかという意味である。たまに来る関係では心は満たされないといい、逢えない日は忍び、心は乱れ、逢瀬の日を心待ちに数えていると詠む。稀なる逢瀬を歎き、さらに逢えない多くの日の歎きを訴えている。

③は「七夕」を詠じた歌である。「わくらばに」は七夕に掛けて年に一度の逢瀬を意味している。「よる」は「寄る」と「夜」との掛詞である。天の川の河波が寄せる、その夜は夜のままで、空は夜が明けるのには任せないで欲しいと詠む。「わくらばに」は年に一度であるが、逢えるのである。ただ、その逢瀬を一夜だけのものにはしたくないという思いが込められている。久保田淳氏は「七夕の恋をあたかもみずからの恋のごとくに受け止め、後朝を惜しむ女の心を歌った<sup>③</sup>」と解された。

④の元輔歌は、掛詞を利用した序詞を受ける詞として「わくらばに」が用いられている例である。この用法は後述する雅経歌にも用いられている。「わくらばに」は、今日という日が、偶然、男の訪れる日であったということを詠じている。大井河の流れが井堰を押し分け進む、その「わく」ではないが、「わくらばに」というつながりである。井堰の水が「わく」のを見て、まさに偶然、「わくらばに」今日が逢える日であることを思い出したというのである。たまたまという状況説明が的確に表現されている。詞書は「ある人につかはしし」とあるが、藤本一恵氏は「歌の内容からすれば、男を待つ女の風情である。女性に依頼されての作歌とみて、書本『人にかはりて』を採るべきであろう」と考察された<sup>④</sup>。さらに、男の訪れの遅さが発想の元にあるとして、「わくらばに(たまたま) 今日はある人が私に約束してくれた暮れではありませんか。(それに遅いのはどうしたわけですか。)」と通釈されている。

⑤は「怨十首」とあるが、「怨恋」である。「わくらばにきたる時」というのであるから、男はたまにはあるが、女のもとに来たのである。この「からころも」について、「裾を前で合わせない唐衣」として「唐衣の裾が合わないように、逢う手段もない<sup>⑤</sup>」と考察された。来ない時はもちろんのこと、たまに来た時でさえ、衣を重ねることはなかったであろう。そのため、「あふよしもなきうらみ」という、会った甲斐もなく、怨むことになったのである。

⑥の詞書は「五日、風はげしく吹きて、のこりなくちる、ことのはも」とあり、恋歌である。稀にあった男からのことの葉(手紙)も、山風が木の葉を散らし、すっかりなくなったようになくなり、山風の音ばかりを聞くだろうと初めから思っていたと詠む。稀にあった手紙も今はないのである。「会不逢恋」



なのであるが、「待恋」でもある。

⑦は、『相模集』の次の一連の中の「返し」の歌である。

あやおりになたちし人を思ひてかよひしころ、おなじころとがむべき人のもとにやりし

ふししげみあやにおりたついによりこちくるとはおもはざりなむ

かへり事なたかき人の御さかしらなるべし

いづくにかよるらむとのみしらいとのあやしかりけるふし所かな

返し

⑦は「返し」とある歌である。男の妻に送った歌なので、恋歌とは言えないが、「わくらばにまゐくる」というのであるから、男は稀に作者のもとを訪問していたのである。男の妻から「あやしかりけるふし所」と言われて、「あやまちのしげくみゆれば」と返したのである。この部分「ご主人は浮気のお相手がずいぶん大勢いらっしゃるようにお見うけしますの<sup>⑥</sup>で」と解されている。男はたまに訪れることもあったが、これからはそうしたことも絶えてしまいうだろうと詠む。「わくらばに」は、稀にはあるが、逢瀬はあったのである。その逢瀬を待っていたとするなら、「待恋」の内容を持つ。

⑧は題にあるように「初めて遇う恋」である。男女が初めて逢う夜、偶然夜の衣の紐が解けたので、縫うことができた。これは、私の心が、夜の衣が裏がないように、あなたに一途であることを示すと詠む。初めての逢瀬で、たまたま衣の紐が解けたことを契機として、「うらなき物（心）」<sup>⑦</sup>という一途な思いを訴えている。偶然衣の紐が解けたのである。この「わくらばに」の用法は偶然、事が起こったのである。

⑨は、偶然、恋しいと思う人に逢う夢を見たのである。その嬉しい夢は覚めずにいてほしいと詠む。小町歌にあるように、逢いたいと「思ひつつ寝」たのでも、「夜の衣を返して着」たでもないのに、偶然逢いたい人の夢を見たのである。現実ではなく、夢ではある。この「わくらばな逢瀬を」覚めないでと願うのは、覚めてしまえばいつまた逢えるか分からないからである。夢の中のことであるが、「わくらばな」逢瀬を喜ぶ。題は「夢」であるが、「待恋」の歌である。

⑩の詞書は「おなじ女のもとより」とあり、女の恋歌である。たまにでも訪問があったならば、思う心のほどを語ることもできるのだが。それも無く、どうしようかと言い、「わくらばに」さえ、訪問がないと詠む。「わくらばに」でもよいから、訪れて欲しいという女心が見える。「待恋」の歌である。

以上のように、恋歌にあつて、「わくらばに」は、二で見たように、偶然、何かをしたり、何かが起こったりするのではない。稀にはあるが、男からの逢瀬がある。または、その「わくらばな」訪問もないことが詠じられる。前者のようなまだ希望があった状況は①②③⑤であることから、比較的古い時代、後者のような悲観的な状況は⑥⑦⑩であることから、比較的新しい時代の発想と言える。⑧のような、偶然な出来事が詠じられることがあるが、恋歌に

あつては、「わくらばに」は「わくらばな」逢瀬が発想の前提となっている。テーマは⑤の「怨恋」、⑧の「初遇恋」もあるが、多くは、①②③の「後朝恋」、④⑥⑦⑨⑩の「待恋」である。また、二の「恋歌」ではない歌では、二例見出すことが出来たが、恋歌では、行平歌の直接的な影響が見られる歌はまだこの頃にはない。

物語中の歌として、『源氏物語』『夜の寝覚』に例歌がある。

- ⑪ 「わくらばに行きあふみちをたのみしもなほかひなしやしほならぬ海」  
〔源氏物語〕「関屋」
- ⑫ 「わくらばにながれあふ瀬をなみだのみいひやるかたもなくてやみにし」  
〔夜の寝覚〕一七・大納言

⑪は石山詣でに来ていた光源氏は空蟬の乗る牛車と逢坂の関ですれ違い、後日、手紙に添えて送った歌である。偶然に行き会った近江路を逢う道として頼みにしてきたが、さすが潮海ではない淡海なので貝がないように行き会った甲斐はなかったと詠む。物語上のことであるが、偶然に逢ったのである。

⑫は「わくらばにあふ瀬をなみだ」と詠む。たまの逢瀬もなく、涙を流し、言うことも出来ずに終わってしまったと詠む。恋歌である例歌は、「わくらばに」は「あふ瀬」に掛かっている。わくらばな逢瀬もないことを歎いているのである。

『源氏物語』歌は、「わくらばに」は、偶然の出会いを詠じており、恋歌ではない歌の用法に近い。ただ、逢瀬を頼みとしていたことを思えば、「わくらばにあふみ」と続き、「わくらばに」逢瀬という関係を見ることが出来る。『夜の寝覚』は「わくらばな」逢瀬もないことを詠じており、「わくらばに」「あふ」と続く恋歌の用法に合致している。また、行平歌との関係について、『源氏物語』歌には「海」「行き」が詠じられており、「須磨の浦」「行平」を響かせていると言える。

#### 四

新古今時代の私家集での、「恋歌」ではない用例を考察する。

- ① 「それをだにうづみなはてそわくらばにとはれし跡も雪の下道」  
〔隆信集〕一二八 正治二年百首歌
- ② 「わくらばにとへかしひとのけふのくれはるのわかれにわぶとこたへん」  
〔明日香井和歌集〕春・三二三

- ③ 「はやくゆくいはまの水のわくらばにうきてもめぐるあはれよの中」  
〔明日香井和歌集〕六〇八
- ④ 「わくらばにとはれし人も昔にてそれより庭の跡はたえにき」  
〔拾遺愚草〕閑居二首・一七七二
- ⑤ 「わくらばのはなのたよりのやまざとはおなじみやこのともすみけり」  
〔如願法師集〕春・三九五
- ⑥ 「わくらばにいかにととはん人もがなはれぬ雲ゐの秋をこたへん」  
〔後鳥羽院御集〕秋百首・七七二

①は『正治初度百首』では、冬の歌である。たまたま訪問客があった足跡をせめて埋めないでと詠む。雪に残る訪問客の足跡をいつまでも見ていたいからである。この稀な訪問は次いつ来るか分からないのである。また、「わくらばにとはれし」には、行平歌の影響が考えられる。<sup>(8)</sup>

②は春の歌である。三月尽の今日の暮れ、偶然を装い、訪うて欲しい。春の別れに際し、辛いと答えようと思うからと詠む。結句の「わぶとこたへん」より、『古今』行平歌を本歌としている。本歌は、「わくらばにとふ人あらば」と仮定のこととして発想するが、わくらばにも問う人はいないことを前提として、「わくらばにとへかし」と訪うことを命じている。

③は、三の③元輔歌の「ぬせきのみづのわくらばに」と同趣向の「わく」の掛詞を利用した「わくらばに」の用法である。題は「尺教十是身如聚沫」であり、『維摩經十喻』の「是身如聚沫不可撮摩」に依る。人の身は泡のようにはかないと喩える。

④は、行平歌を本歌とする。「わくらばにとはれし人も昔にて」と、昔はたまたま人に訪われることもあったが、それも昔のことであつたとし、今では「庭の跡はたえにき」と訪問者は絶えたと詠む。救いような寂しさであるが、主情的でないことにより、美としての寂しさの極致が詠じられる。「わくらばに」会うことは、今はないが過去にはあつたのである。

⑤は、偶然、山里の花の便りを聞き、この山里には都と同じ友（桜）が住んでいると詠む。たまたま、山里の桜の開花を知つたのである。

⑥の上句「わくらばにいかにととはん人もがな」とは、行平歌「とふ人あらば」という仮定表現を、訪う人があればいいのになあと、願望の表現へと置き換えている。行平が思うようには、尋ねる人はないことを前提にしている。本歌の下句は「もしはたれつつわぶとこたへよ」と明快な表現であつたが、「はれぬ雲ゐの秋をこたへん」と象徴的に言い換えている。晴れぬ心と、その飽きられたことを伝えようとしている。「わくらばに」も訪れる人がいないからである。

以上、恋歌以外の六首を見たが、①は冬、②⑤は春、③は釈教、④は閑居、⑥は秋の歌であつた。「わくらばにとふ」ことが詠まれており、行平歌の影響が考えられる。①は「わくらばにとはれ」た跡を雪で埋めないようにと願ひ、④は「わくらばにとはれし人も昔にて」と、「わくらば」な訪問以後は訪問はない。また、②は「わくらばにとへかし」と言い、⑥は「わくらばにとはん人もがな」と「わくらばな」訪問を願っている。これら四首には恋歌に通じる会いへの思いがある。いわば、『新古今』の歌風の特徴である、自然詠でありながら恋歌とも解される詠みぶりの歌である。①②④⑥は行平歌の本歌取りといってよく、前代の恋歌ではない歌には少し見られた、行平歌の影響が強く表れている。



五

次に新古今時代の私家集での「恋歌」を考察する。

- ① 「わくらばにまちつるよひもふけにけりさやはちぎりしやまのはの月」  
〔秋篠月清集〕「月前恋」一四五二
- ② 「わくらばのかぜのつてにもしらせばやおもひをすまのあか月のゆめ」  
〔秋篠月清集〕「旅泊暁恋」一四五四
- ③ 「わくらばにたのむる暮の入あひはかはらぬ鐘のおとぞさびしき」  
〔拾遺愚草〕恋・九七五
- ④ 「わくらばにかよふ心のかひもあらじたのむ吉のかざしばかりは」  
〔拾遺愚草〕恋・一三八二
- ⑤ 「もしほたれよるまも浪をわくらばにとへどもまたじすまの浪かぜ」  
〔壬二集〕海辺恋・二八〇八
- ⑥ 「わくらばのことはさへにかれにしをみしおもかげのかたみがほなる」  
〔如願法師集〕恋・六一三
- ⑦ 「わくらばにとひこし比におもなれてさぞあらましの庭の松かぜ」  
〔後鳥羽院御集〕寄風恋・一六〇九

①の「わくらばにまちつる」とは、たまにしかない男の訪れを待つということである。逢うことをあてにさせた恋人を待つていた宵の時も更け、「わくらばに」山の端に遅い月の出に会い、この時間まで待つことを約束したのかと詠む。「わくらばな」恋人の訪問を待っていて、「わくらばに」月の出にも出会ったのである。<sup>⑨</sup>この「わくらばに」は、二つの詞にかかっている。

②は、偶然の風の便りにでも知らせたい。あなたを恋しく思っ須磨の浦で暁の夢に見ていることをと詠む。<sup>⑩</sup>須磨が詠じられていることより、行平歌を本歌としている。行平歌の「わくらばにとふ人あらば」を、問う人はないとして、「わくらばのかぜのつてにもしらせばや」と詠む。偶然の風のたよりだけが頼みなのである。行平歌の下句「もしほたれつつわぶとこたへよ」といった感情の入った具体的表現を、「すまのあか月のゆめ」と侘びしさとはかけ離れた物語的で美的な海辺の景色へと転じている。

③の「わくらばにたのむる暮」とは、たまにある逢瀬を頼みとして待つ夕暮という意である。その来ることをあてにさせた恋人を待っていると、「わくらばに」夕暮れ時の入相の鐘の音が鳴ったのである。ただその鐘の音は、恋人を待つことなく聞いていた鐘の音と同じような寂しい音色であったと詠む。久保田淳氏は「あの人が来なくなって久しい」と解され、「待つほどのすぎのみゆけば大井川たのむる暮もいかたとぞ思ふ」(『後拾遺』雑・九〇五 馬内侍)を参考歌とされる。<sup>⑪</sup>待っても来ないことを予想させるのである。また、「わくらばに」が二つの詞にかかっている点は、①と同様な詠法である。

④は、恋人は「わくらばに」通つては来るのである。ただそれでは、吉野の桜をかざしとして手折ただけでは花を愛する心の甲斐もないように、愛する甲斐はないとして、「わくらば」ではない逢瀬を願う。久保田淳氏は「なおざりに愛するのではなく、妻として愛せよの意か」と注釈されている。「わくらばな」逢瀬では満ち足りることはないのである。

⑤は「わくらばにとへどもまたじ」とは、まれに訪問があるというのではなく、たまに便りはあるが、訪れを待つことはするまいというのであろう。夜、涙を流しながら、須磨の浦風の音を聞いている。本歌の行平歌の「もしはたれつつわぶ」という状況が、須磨の浦を吹く風により、歎きの心は静謐化される。行平歌の流謫の歎きを、待恋の歎きに詠み変えている。前代の三の恋歌では、「わくらばな」逢瀬であっても、その時を待ち焦がれていたが、「わくらばな」逢瀬をも期待しない冷めた心が詠じられている。

⑥は「わくらばのことはさへかれにし」と、たまにはあった訪問を告げる手紙までもなくなったと言い、あの人の面影が形見と思わせるようだと詠む。たまにはあった手紙も今では全くなかったのである。救いのない待恋の歎きが詠じられている。

⑦は「わくらばに」訪問はある。その「わくらば」な訪問を喜び、期待する心が、「わくらばに」訪問された頃の思いに日々慣れてしまい、本当に逢瀬を期待させるように、庭の松風が吹くと詠む。これまで見た恋歌とは違い、「わくらば」な逢いに期待する心が詠じられている。ある意味、初々しい心と言える。

②⑥の「わくらば」な逢瀬さえないと詠むことは前代（『古今』から『新古今』以前まで）にもあった。しかし、①③の「わくらば」は、「わくらばな」逢瀬と「わくらばな」偶然の出来事を重ねるという前代にはない技巧が見られる。また、「わくらばな」逢瀬を期待させるが、それは叶わないと詠む（①③）。期待さえしないと詠む（⑤）。これらは、前代にはなかった新しい恋歌の詠作法である。

## 六

以上のように、「わくらばに」は『万葉集』から詠まれている詞であるが、『万葉集』においては、ただ、偶然や稀であることを意味するのではなく、仏教思想の和歌表現として用いられていた。偶然、たまたまといった意味では「たまさかに」が『万葉集』では用いられていた。行平が「たまたま」という普通の意味で「わくらばに」を用いたことは、思想的背景を除いた和歌の詞として用いた点に功績があったと言える。行平歌の成立により、「わくらばに」と「たまさかに」との違いが不明瞭とはなったが、和歌表現の可能性を開いた。

前代（『古今』から『新古今』以前まで）にあつては、恋歌における「わくらばに」には、「わくらばな」逢瀬が着想されている。また、行平歌の影響は見ることは出来ないが、恋歌以外の歌には、行平歌を意識した例歌も認められる。「わくらばにとふ」ことが着想されているのである。

『新古今』時代の「わくらばに」を詠んだ、恋歌以外の例歌は、行平歌の影響が強く表れており、恋歌的イメージも認められる。恋歌においては行平歌を本歌とした歌は、二例である。必ずしも多いとは言えない。「わくらばな」逢瀬を詠じるも、前代のように、逢瀬を期待することはない。行平歌の「わくらばにとふ人あらば」とは、たまたま私のことを尋ねる人があるならばと問いかけたのだが、安否を問う人がないことからきた表現であり、「わくらばにとふ」で欲しいという願いが込められたものであった。この「とふ」が問うではなく、訪うと転じて「わくらばな」訪問、逢瀬という恋歌の発想となったと思われる。そして、その願いは叶わないとして発想したのが『新古今』時代の、女歌の恋歌の特徴であった。

「わくらばに」は、和歌表現においても、偶然を表す詞であったが、恋歌において、「わくらばな」逢瀬さえなくなったと詠む点に、女歌の「会不逢恋」「待恋」に相応しい詞となった。『新古今』時代は行平歌を深く理解し、表現の可能性を広げた。新古今時代の恋歌ではない歌も含めて、「わくらばに」の歌は行平歌を強く意識して発想されたと言える。

## 註

- (1) 『平家物語』では、「人身は請がたく、仏教にはあひがたし」と記す。その注に「人間としてこの世に生を受けることは容易でなく、」として、「人身難受」(六道講式)を引用する。(新日本古典文学大系『平家物語 上』岩波書店・一九九一年刊・二七頁)。憶良歌について、伊藤博氏は「人間として生まれてきたことを至福のこととしていったもの。『涅槃経』(高貴徳王菩薩品)に『人身ノ得難キコト優曇華ノ如シ』とある」と注された。(『万葉集釋注 三』集英社・一九九六年刊) 一九四頁。
- (2) 藤本一恵氏著『清原元輔集全釈』私家集全釈叢書8 (風間書房・平成元年刊) 二七一頁。後藤祥子氏著『元輔集注釈』私家集注釈叢刊6 (貴重本刊行会・平成六年刊) 三四七頁。
- (3) 久保田淳氏著『新古今和歌集全注釈 二』(角川学芸出版・平成二三年刊) 五七頁。
- (4) 註(2)に同じ。二七一頁。
- (5) 金子英世・小池博明・杉田まゆ子・西山秀人・松本真奈美著『千穎集全釈』私家集全釈叢書19 (風間書房・平成九年刊) 一四七頁。
- (6) 武内はる恵・林マリヤ・吉田ミズズ氏著『相模集全釈』私家集全釈叢書12 (風間書房・平成三年刊) 一三二頁。
- (7) 「うらなき」について、「衣の裏が無く単であること。二心が無い、一途であるという意味の『うらなし』を掛ける」と説明される。(青木賢豪家永香織・久保田淳・辻勝美・吉野朋子著『堀河院百首和歌』和歌文学大系15・明治書院・平成一四年刊) 二八二頁。
- (8) 樋口芳麻呂氏は、行平歌と④定家の「わくらばにとはれし人も昔にてそれより庭の意跡はたえにき」の二首を「念頭にあらう」と考察された。『隆信集全釈』私家集全釈叢書29 (風間書房・平成一三年刊) 一五八頁。

- (9) 窪田空穂氏著『完本新古今和歌集評釈 中巻』（東京堂出版・昭和三九年刊）四一九頁。
- (10) 谷知子氏は「たまたま吹く風の一つでもよいから知らせたい。あの人を恋しく思つて須磨の浦で暁の夢にみている」と口語訳されている。（『秋篠月清集／明恵上人集』和歌文学大系40・明治書院・平成二五年刊）二三七頁。
- (11) 久保田淳氏著『訳注藤原定家全歌集 上』（河出書房新社・昭和六〇年刊）一五〇・四八九頁。同書では結句は「ひさしき」である。
- (12) 註(11)に同じ。二二三頁。

〔付記〕テキストは、『新編国歌大観』CD-ROM版 Ver.2、『平家物語』は『新日本古典文学大系』『平家物語上』を用いた。